

えんぽとたんぽの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第57号	2006年4月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：西原 一誠
---------------------------	---	--

1. 活動報告（事務局 記）

- 3月28日（火）役員会および監査
- 4月2日（日）平成18年度総会が開催されました。（会員30名の出席）
- 4月15日（土）今日の活動はあいにくの雨のため、午前中の屋外での作業は中止し、午後の観察隊のために、草餅を作りました。午後雨でしたが、子供達は元気よく「食べられる野草」を懸命になって探していました。採取した野草の名前を確認して、天ぷらにして草餅と一緒に食べました。隊員29名、保護者18名、会員18名の参加でした。
- 4月22日（土）ファミリーサポートセンターの交流会がありました。市民センターに集合後、ビオトープで観察を行う予定でしたが、残念ながら、雨の為簡単な説明で終わってしまいました。（約40人参加、会より今井会長、潮村、若林会員で、対応しました）

2. 今後の予定（事務局 記）

- ◎ 見学者
 - 4月より ネイチャークラブが毎月ビオトープで散策活動をされます。岡田さんより（案内者不要です。）
 - 子どもエコクラブの毎年のビオトープでの行事依頼（日程不明）ただし案内者2～3名要望あり
- ◎ 行事
 - 5月7日（第一日曜日）の活動（従来の活動）
 - 5月20日（第三土曜日）の活動（従来の活動）
午後は里山自然観察隊の第2回目の観察活動（野鳥）

3. ビオトープ関連（ビオトープ周辺の植物） 美濃和 信孝

ビオトープに咲くスミレ

春を迎えてビオトープにはいっせいに花が咲き出しました。ビオトープで咲いているスミレを2種類ご紹介します。

ため池のまわりには、濃い紫色のスミレが咲いています。これはノジスミレです。「野路スミレ」という名の通り、道路や野原などの日当たりの良いところに生えます。花の色は「スミレ」に似ますが、全体に白くて細かい毛が生え、葉の裏がやや紫色がかっていることで区別できます。また、「スミレ」は葉柄に翼がありますが、このノジスミレは翼がほとんど目立ちません。地上茎がなく、直接地面から葉や花茎を出すスミレなので、背は低く、10cm程度です。ですから、芝生のように良く刈り込まれた場所が好みです。背は低くてもたくさんの花を付けるので、今の時期、紫色の花のかたまりは遠くからでも良く目立ちます。

湿地の周りの湿った場所で目立たない白い花を付けているのはツボスミレです。ツボは壺ではなく坪のこと、庭や道端といった狭い場所に生えるスミレという意味です。別名のニョイスミレは、仏具の如意の形に似ていることから牧野富太郎博士が付けたといわれています。如意と言われてもピンと来ないでしょうが、孫の手の先がハート型の葉のようなものになっている仏教用の道具です。如意輪観音という仏像は、何本かある手の一つにそれを握っています。その形とツボスミレの花茎のカーブが似ているので、ニョイスミレという名前が付けられたという説と、葉の形が似ているから、という2説があり、どちらが本当なのかよくわかりません。ツボスミレは地上茎を持つスミレです。

良く見かける薄紫色のタチツボスミレは、地上茎が立ち上がって背が高いのに対し、ツボスミレは匍匐性なので背は高くならず、地面を這って広がっていくタイプです。白色の花は、スミレの仲間でも最小だそうで、注意深く見ないと見過ごしてしまいそうな花ですが、花卉の中心部には細かく紫色の筋が入っていて、ルーペで拡大して見ると造化の妙に打たれます。



ノジスミレ（スミレ科）



ツボスミレ（スミレ科）

4. ビオトープ関連（会員の声） （藤井 祐子 記）

春、気持ち新たに

昨年10月、夫に誘われて入会しました。それ以来、活動に参加する度、初めての体験をいろいろとして楽しませていただいています。鎌を使っての稲刈り、そばや椎茸の収穫は初めてだし、軽トラの荷台に乗る、なんていうのも初めて（笑）。ビオトープで行っているような作業を今まで殆どしたことがない私にとって、何もかも新鮮です。また、会員の方々の手際のよい仕事ぶりにも感心しました。そして、実際に目の前にある植物や生きもののことを教えていただき、興味が湧いてきました。

ビオトープへ行くと自然がいっぱいあった昔に戻ったような気持ちになり、心が休まります。自宅からそう遠くない所に、このような場所があることは幸せです。

今年度から第三土曜日は、終日活動日となりました。作業の合間には勉強の時間もとれるようです。環境破壊が危惧される中、ビオトープの活動に関わることで、まずは、身近でどのような事が起こっているのかを知りたいと思います。

私事ではありますが、今春、長女は大学院に、次女は大学に進学しました。子供達に刺激されて、私も気持ちを新たに色々な事にチャレンジしたいと考えています。

ビオトープでは、これから本格的な活動時期になりますね。私は、暑さに弱く、戦力になれるか大いに心配ですが、日焼け対策をばっちりして活動に参加したいと思います。

みなさま、夫共々どうぞよろしくお願いします。

次回は 会員にリレーします。宜しく

5. 里山自然観察隊（4月15日、隊員29名、保護者18名、会員18名）

食べられる野草

探した食べられる野草・木の芽 20種

1. タンポポ 2. ノアザミ 3. ハハコグサ 4. フキ 5. ヨメナ 6. ヨモギ 7. カラスノエンドウ
8. ゲンゲ(レンゲ) 9. クズ 10. セリ 11. オランダガラシ(クレソン) 12. タネツケバナ 13.
ナズナ 14. スイバ 15. ノビル 16. ツクシ 17. ワラビ 18. タラノメ 19. コシアブラ 20. タ
ケノコ

子ども達が見つけた種類

1~18までの18種（雨天のため林内には入らず、19、20は未発見）

天ぷらにして食べた種類

9. クズ、19. コシアブラを除く18種+サツマイモ、ゼンマイ

まず驚かされたのは、この雨天の中、一生懸命野草を探して走りまわる子ども達の姿です。たくさん探せば俣瀬券というご褒美があるんだよ、と事前のアナウンスはしていましたが、子ども達の真摯なまなざしを見る限り、ご褒美なんか二の次ではなかったのでしょうか。取って食べる、という生き物にそもそも備わっている本能みたいなものが、きょうの子ども達には十二分に発揮されていました。これがある限り、これから先も人類は大丈夫！という感じさえしました。きょう一番たくさん種類を探した子どもは、17種です。12種以上探した子どもが約3/4もいました。私は午前中、見本のサンプルを探すために、スタッフ6人の協力を得て、2時間近く掛けてやっと20種を探し当てました。ところが子ども達は、40分足らずの間に易々とその大半を見つけてしまったのです。恐るべき能力です。今年は、子ども達に種類を再認識させるためと、誤食を避けるために、食べる前に種類ごとに集めて私が再チェックを行ないました。ところがほとんど100%近い確率で、子ども達は正しい野草を集めていました。これはたいへんすばらしい認識能力ではないでしょうか。葉っぱのかたちがどうか、おしべが何本かということより、ぱっと見た目の直感でわかることがたいせつなのです。親しい人の顔がすぐわかるのと同じように、生き物も一目でわかるようになって欲しい、というのが私の願いです。それが自分に関係する（例えば食べる対象として）となれば、生き物も自分と親しいものになると思うし、自然をたいせつにしようという心も湧いてくると思うのです。身近なところにある野草が、本当はほとんど食べることができるんだ、ということを知ってもらだけでも、好奇心がきらきらと前面に出ている子ども達にとっては効果抜群です。子ども達の自然に対する好奇心、それをいかにうまく引き出していくか、というのが我々おとなの役割でもあると思います。

二俣瀬ビオトープの里山自然観察隊は、すばらしい自然の学びの場です。きょうもたくさんのスタッフの皆さんの協力があつたからこそこの観察会ができました。これからも、次世代を担う子ども達のために、多くの人達がこの里山自然観察隊を支えていってほしいと願っています。

（美濃和 信孝 記）

6. 来訪者の声（東屋のノートより一部抜粋）

今月はありませんでした。

7. 会よりの連絡事項

- 1) 事務局長の原田さんは4月中旬より仕事のため、出張中です。予定では7月初めまでです。その間の事務局の代行は、若林さんが行われますが、皆様のご協力をお願い致します。

8. 編集後記

二俣瀬のビオトープでは多くの絶滅危惧種が見られます。デンジソウやアサザなどの植物、メダカやトノサマガエルなどの動物などです。特定の種を保護するのではなく、昔の里山には多くの多様な生き物が住んでいましたが、そのような環境を造ってやれば、自ずと多様な生き物は住み着きます。何もしないのが自然ではなく、積極的に手を加えて、従来 of 里山であった原風景を復元していくことが、絶滅を防ぐ一つの方法だと感じています。そのためには何をするのか考えなくてはいいませんが、美濃和さんが言っておられるエコアップも自然を考えての提案です。外来種は一般的に侵食が早く、従来の生き物を脅かします。移動の時間がゆっくりであった頃に比べれば、今はスピードの時代であり、一部に持ち込まれた（人為的ではなくても）外来種がその場を淘汰するのは、あっという間です。また、これからは草刈りに追われますが、昔の里山はよく手入れをされていました。草を刈ることにより、今号のスマレなどの背の低い野草は、生き延びていくことができます。すべての場を草刈りすれば、今度は背の高い野草は生きていけません。このあたりのバランスも場所を考えて行わなければなりません。しかしあまり考えすぎないで、皆さんでわいわいがやがやと言いながら、少しずつ理想を追っていければ良いと思っています。皆様のご協力をよろしくお願い致します。

（西原 一誠 記）